

中世鎌倉火鉢考

— 東国との関連において —

河野 眞知郎

1. はじめに

かなり以前からときどき、東国で中世遺跡から土器を発掘した担当者に、鎌倉の土器との対比を求められることがあった。多くの場合それは「かわらけ」であって、鎌倉の編年観が必ずしも東国に通用するものでないことも、かなりあった。その際逆に「こんな土器は出ていませんか」といって「火鉢」の破片を見せると、「いや、見かけませんね」という言葉が返ってくる場合が多かった。鎌倉の中世層にごく一般的な火鉢が、なぜ他の地域で出土しないのか不思議に思ったことがある。しかし報告書をあさってみると、少量ながら各地で火鉢の出土は知られている。

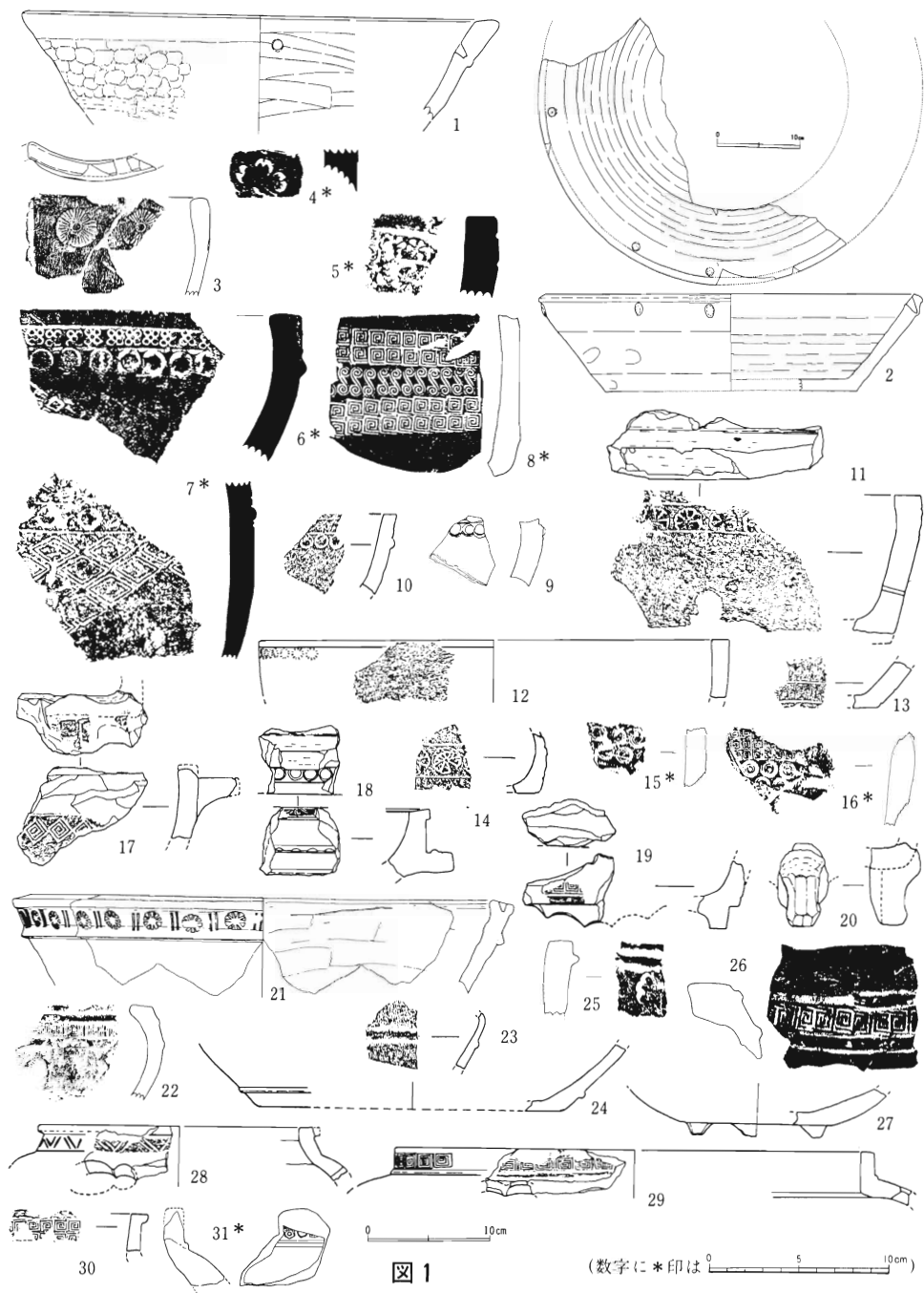
鎌倉の火鉢については、これまで断片的にしかまとめてこなかった⁽¹⁾ので、そろそろきちんと分類・編年を提示しなければいけないと感じていたところである。今回本誌上を借りるにあたって、単に鎌倉の火鉢をまとめるに終らせず、火鉢のあり方をめぐって鎌倉と東国の関連をもさぐってみたいと思う。

2. 東国各地での火鉢の出土

東国の中世遺跡での火鉢の出土は、鎌倉以外では微々たるものと言えそうである。これは中世遺跡の調査例が少ないからではなく、住居内で火鉢を使用するような習慣が、寺院や城館などを除いて普及していなかったためと考えられる。そうした中で管見に入った限りではあるが（筆者の怠慢で報告書あさりも充分にはしていないのだが）、東国での火鉢の出土例を少し見ておこう。⁽²⁾

図1-1は神奈川県宮久保遺跡出土の、土器質浅鉢形の火鉢である。内面のナデ、外面の指頭痕などは鎌倉の分類（次項参照）のⅠC類に似るが、口唇形態はⅠB類に似る。内壁の穴は外面に貫通していない。鎌倉以外の東国では最古の例といえよう。2は栃木県下古館遺跡出土の、瓦質に近い焼きの火鉢で、貫通しない複数の穴が内面にあく。口唇形態は異なるが鎌倉のⅠC類に近いものと思われる。

3も下古館遺跡出土で、瓦器質輪花状の火鉢で大きな菊花文スタンプを捺す。鎌倉のⅢ類そのものといえよう。4は神奈川県称名寺境内出土で、大きめの桜花文スタンプを捺す。



小片だがやはりⅢ類と見てよからう。

5～7も称名寺境内出土。瓦器質で小型スタンプを沈線間または横位に並べて捺し、連珠貼付文を加えたりする。鎌倉のⅣA類に相当する。称名寺は北条氏の一流たる金沢氏の寺であるから、鎌倉文化圏内とも言えるわけで、火鉢の出土が多いのも異としない。8は福島県梁川町茶臼山西遺跡（東昌寺跡）出土で、小型スタンプを横位に密に捺し、香炉類の可能性もあるが、Ⅳ類に近いものといえよう。9は埼玉県川越市天王遺跡出土で、連珠貼付文がみられることから、Ⅳ類と考えられる。10～14は静岡県韭山町御所之内遺跡（堀越御所跡）出土で、小型スタンプを沈線内または横位に捺しており、鎌倉のⅣ類に相当する。なお11は口唇がやや内に引かれⅣB類に近いかもしれないし、14は香炉類の可能性もある。15・16は茨城県水府村山入城出土で、小型スタンプが密に捺され香炉の可能性もあるが、Ⅳ類に近いといえよう。17・18は堀越御所出土で鏝の付くⅣC類に当る。鎌倉でも数少い角形の火鉢である。19も堀越御所の肘木状の飾りの付く脚部片で、鎌倉のⅣ類によく見られるものである。20も堀越御所例だが獣脚ふうの破片で、香炉の大きいものかもしれない。

21は川越市天王遺跡出土で、口縁直下の凸帯間に小型の花文スタンプを捺し、鎌倉のⅤ類に相当する。22は川越市会下遺跡出土で、凸帯間に雷文スタンプを捺す。口縁が内弯する形などは鎌倉の御成小学校内の例（図7-13）によく似ている。Ⅴ類の典型といえようか。23・24は堀越御所出土で、凸帯を有することからⅤ類とみなせるが、23は土風炉であるかもしれない。25・26は茨城県山入城出土で、凸帯と小型スタンプの組み合わせはⅤ類とみなせる。26は22とよく似ている。27は堀越御所出土の底部片で、この脚を板状脚とすればⅤ類あたりに入れうるが、無文であることと胴の形状からは大きな香炉の可能性が強い。28～31はⅤ類と関連すると思われる土風炉で、28～30は堀越御所出土、31は梁川町東昌寺跡出土である。土風炉の出土は東国でも決して少なくないと思われるが、火鉢との文様の共通性からⅤ類と同時期以降の所産と考えられる。

Ⅳ・Ⅴ類の出土が目立つ韭山町御所之内遺跡は、鎌倉幕府の執権北条氏の本貫地であり、京都系の手づくねかわらけをはじめとして鎌倉と共通する遺物を多く出土している。このように、火鉢類の出土は寺院跡や城館跡に集中していて、農村部での出土はまず皆無といえそうである。またⅠ・Ⅲ類の出土はごくまれで、ましてや鎌倉のかわらけに似たⅡ類は他地域にはなさそうである。そしてⅣ類以降の火鉢と土風炉・香炉類は、割合に広く出土するとみてよからう。そこには、中世前期の段階では東国各地にまだ都市的・上流指向的な生活が取り入れられておらず、15世紀以降に在地勢力が寺院や城館を中心に発展を遂げたことがみてとれそうである（土風炉を含めて考えるならば喫茶の普及と関連するともいえよう）。ここにあげた以外にも東国各地での火鉢の出土例はもっとあるのだが、本稿はその集成を目的とするわけではないので、あえて割愛させていただく。

3. 鎌倉出土の火鉢の分類

(1) 分類の基準について

考古学における“土器”の分類は、「型式」設定とその細分という形で行われるべきだが、鎌倉の火鉢の場合、同一の胎土・焼成・整形技法によって異なる器形が作られていたり、同一器形でも胎土・焼成に大きな差があったりして、従来の分類法を直ちに適用することは問題の所在をかえて見失う恐れなしとしない。そこでこれまでも筆者はそうしていたのだが、鎌倉で経験的（感覚的）にしてきた分類を、ここでも踏襲しておきたい。⁽³⁾中世の土器は自給自足の品ではなく、商品として流通するものである。しかも大消費地鎌倉への土器供給は単一系統の（同一の型式変化を遂げるような）工房の生産量では賄いきれなかったと思われる。複数の工人集団がシェアを競いあっていたと考えた方がよさそうである。火鉢についても、その生産個体数はそう多くはなかっただろうが、上の考えで分類に当たった方が妥当と思われる。基本的には以下の6類に分類できよう。

(2) I類（図2）

概して土器質で、丸浅鉢形の器形をとるものをまとめた。胎土・焼成と整形などから、A～Dの4類に細分しうる。

I A類（図2-1～4）

側壁の外傾がより開いた形で、口唇の断面が三角形に近いものである。胎土はきめこまかいが粗砂、礫砂を含み、まれに輝粒をも交え、焼成は硬めである。往々にして胎芯は灰黒色で、器表は白色ないし肌色を呈する。胴部はやや薄く、底板は胴より厚めである。底板上に粘土紐を巻き上げて成形したと思われる。まれに截頭円錐に近い突起状の脚が付く。口縁下には孔を有さないようだ（焼成後穿孔の例はある）。鎌倉での出土量はI B、I C類に較べると十分の一以下と少ない。

I B類（図2-5～10）

側面観はI C類と同様の逆台形を呈するが、口縁は外反気味にやさしい丸味をおびる。内面は横～斜位のナデ、外面は口縁下まで横ナデで、胴は指頭痕とハケ目を残し、底脇は横のナデ（ヘラも使うか）が強い。外底には砂の付着が顕著である。脚が付く例はみつからない。I C類との差は胎土と焼成で、この類は中砂を多く含み軟質で、暗灰褐色を呈するもの多く、より土器的といえる。中には図2-8、10のように口唇内側にふくらみをもつナデ方をしたものもある。口縁下には内面から外面へ焼成前に穿孔したものが目立つが、穴の数は一定せず、貫通していないものもある。この類では口縁内面の上から1/3ほどに火熱を受けた痕を留める破片が多い。鎌倉での出土量はI C類とほぼ同等で、市街地100㎡当り10～数十片出土することも珍しくないほど多い。

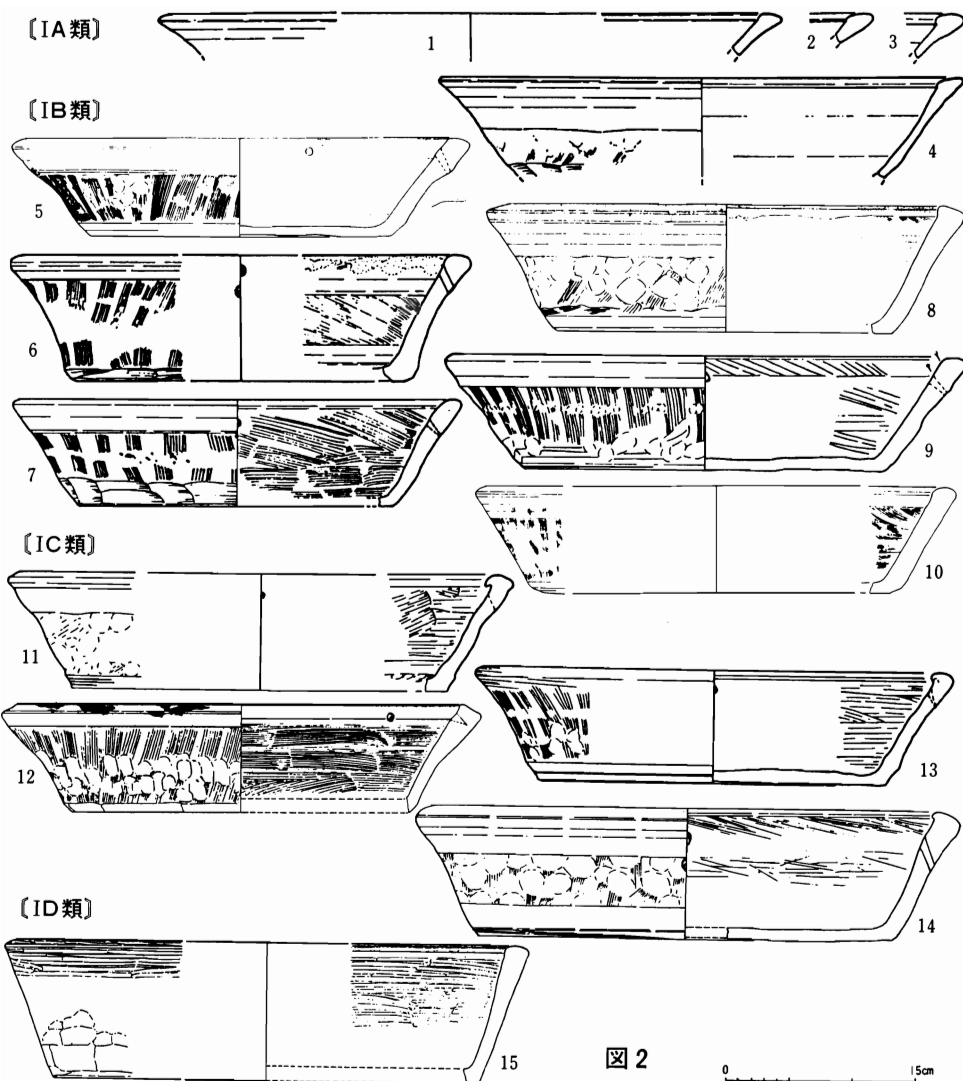


図 2

I C類 (図2 -11~14)

I B類より口唇端が膨れ、内面側に凸帯状に張り出し、断面形が釘頭状を呈する。整形はI B類と殆どかわらないが、ナデはよりこまかく、外面指頭痕がより目立ち、底脇のナデも鋭い。胎土は砂が少なめで少量の軟礫を含み、焼成はごく硬く締っていて、I B類に比し持ち重りしない。外底は砂底で、I B類同様底板上への巻き上げ作りと思われる。やはり脚は付かない。口縁下で穿孔もみられるが、貫通しないものもある。口縁内面に火熱を受けたものも多くあり、I B類と使用法の上での差はなかったようだ。

I D類 (図2 -15)

形は丸鉢形だが胴の立ち上がりは深く、口縁は直口的で丸味をおびる。胎土はこまかな粉質で微砂を交え、焼成は軟質だが軽い。外面に指頭痕等はなく、口唇から外面上部にか

けては、Ⅲ類にみられるような磨きに近いナデが横位に施される。例が少ないので孔の有無は不明だが、おそらく無いと思われる。瓦器質と言って良いようなもので、Ⅲ類と関連するか過渡期的なものかもしれない。今のところ鎌倉でもごく僅かしか出土していない。

(3) Ⅱ類 (図3, 4)

分類法上問題なのはこのⅡ類の置き方である。この類は形態にかかわらず“かわらけ質”であるという一点で括っているからだ。他の類が多かれ少なかれ瓦や瓦器に近い土器で、胎土・焼成に幅をもつのに対し、Ⅱ類はかわらけと共通の砂混り粘土で、黄褐色ないし暗褐色を呈し、軟質の焼きである。そして器形にかかわらず(角形を除くが)、糸切り底かわらけと同様に回転台上で成形されている。つまり、糸切り底のかわらけという在地に伝統的な土器の製作工人たちが、雑多な火鉢をも生産していたのではないかと考えられるのだ(実はかわらけ工房で作られたと思われる少量の異形品には、仏華瓶、高杯、広口小壺、土人形、土製円板などがある)。広い内容をもつこのⅡ類だが、出土量はごく少なく、市街地100㎡当り0～数片といった程度である。それを器形・整形で分類すると、以下の6類、あるいはそれ以上になる。

ⅡA類 (図3-1～5)

胴に丸味をもつ浅鉢形で、口縁端が外方に肥厚ないし角張るように張り出す。底板は厚く、外底には糸切り痕を留めるものが多い。口縁内面に火熱を受けたものも多く、口唇の溶融したものさえ見られる。4のように胴部に焼成後穿孔をしたものあって、容器ではなくⅠ類同様に火皿として使われたことがうかがえる。出土量はⅡ類の中では多い方である。

ⅡB類 (図3-6～8)

口縁端が薄くなり外反する浅鉢で、角錐台に近い板状三脚を付ける。外底面は脚接着時にナデられているが、糸切りではないかと思われる。火処の埋設火皿でなく、Ⅲ類のように板床に置かれる火鉢をめざし、かわらけ工房の者が作ったのではあろうが、出土量はごく少量にすぎない。

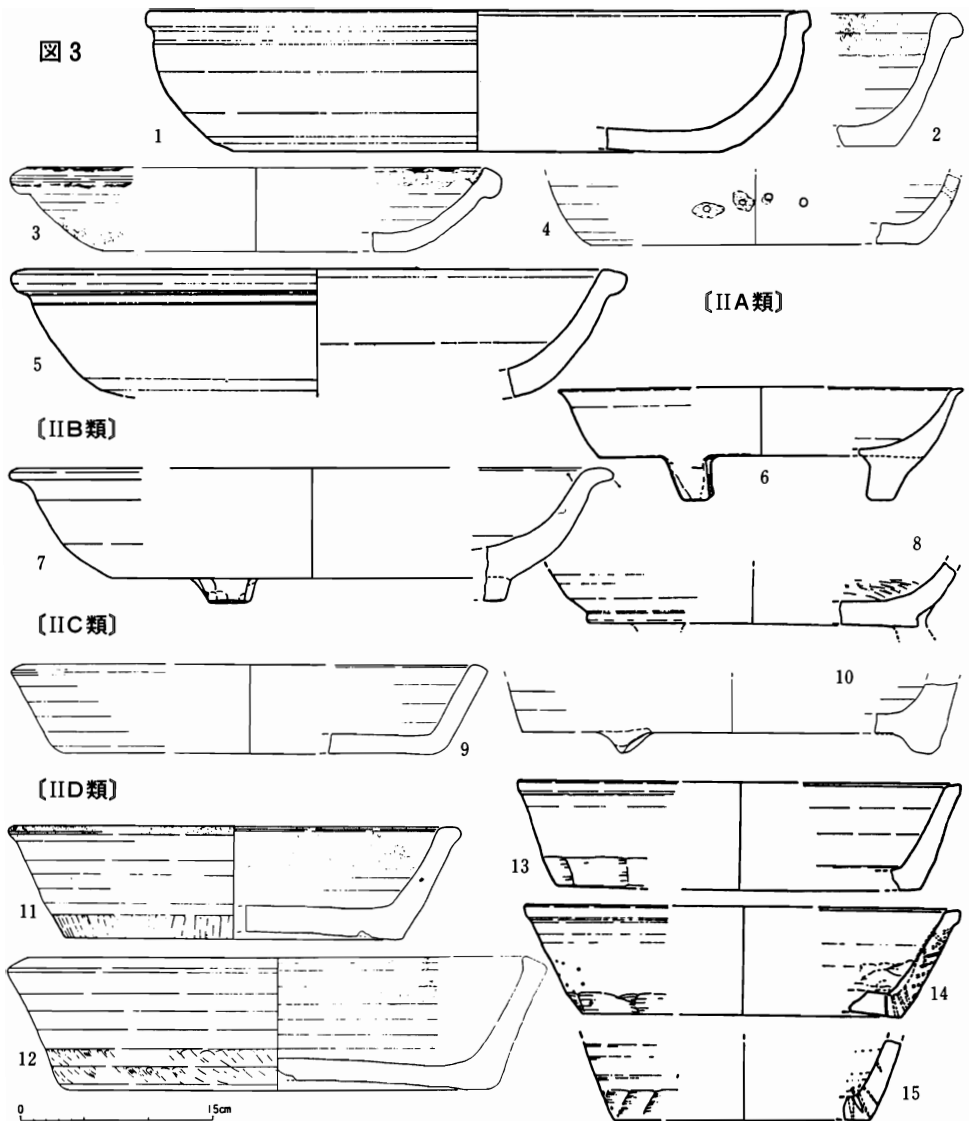
ⅡC類 (図3-9, 10)

側面観逆台形をとる直口の浅鉢形で、10のように貼り付けの脚を付けるものもありそうである。出土例がごく僅かで、類としてまとめうるかどうか自信がない。

ⅡD類 (図3-11～15)

側面観逆台形の浅鉢だが、口縁は肥厚ないし外方に角張るようにつき出す。胴下部底脇に強い削りを加えるのを特徴とする。外底は糸切りである。14・15では焼成前に竹串のような細い棒で、貫通したりしなかったりする、一見無意味な刺突孔が多くある。これはⅡE類にも見られ、この鉢が液体を入れる容器でないことは明らかだが、何のためのものかはわからない。口縁内面に火熱を受けたものもある。出土量はごく僅かである。

ⅡE類 (図4-1～9)



胴部が直線的か丸味をもつかで細分可能かもしれないが、どちらも口縁を折り倒したように外方に張り出す形をとる。太い円錐台状の脚が三つ付き、肘木ふう飾りをつけるものもある。円脚の中央と、口縁を上下に貫通する孔がかけられる他、細い棒による刺突孔が胴下部に多数かけられるものもある。基本的には糸切り底であるようだ。II B類同様の置き火鉢と思われるが、9の角形のは破片を総合すると一辺40cmを超えそうで、それ自体が火炉であったとも考えられる。円脚は市内あちこちで出土しており、II A類と同じくらいの数が生産されたと思われる。

II F類 (図 4 - 10 ~ 12)

II E類の胴部に凸帯をめぐるせたものといえようか。12では円脚と肘木ふう飾りが付き

〔ⅡE類〕

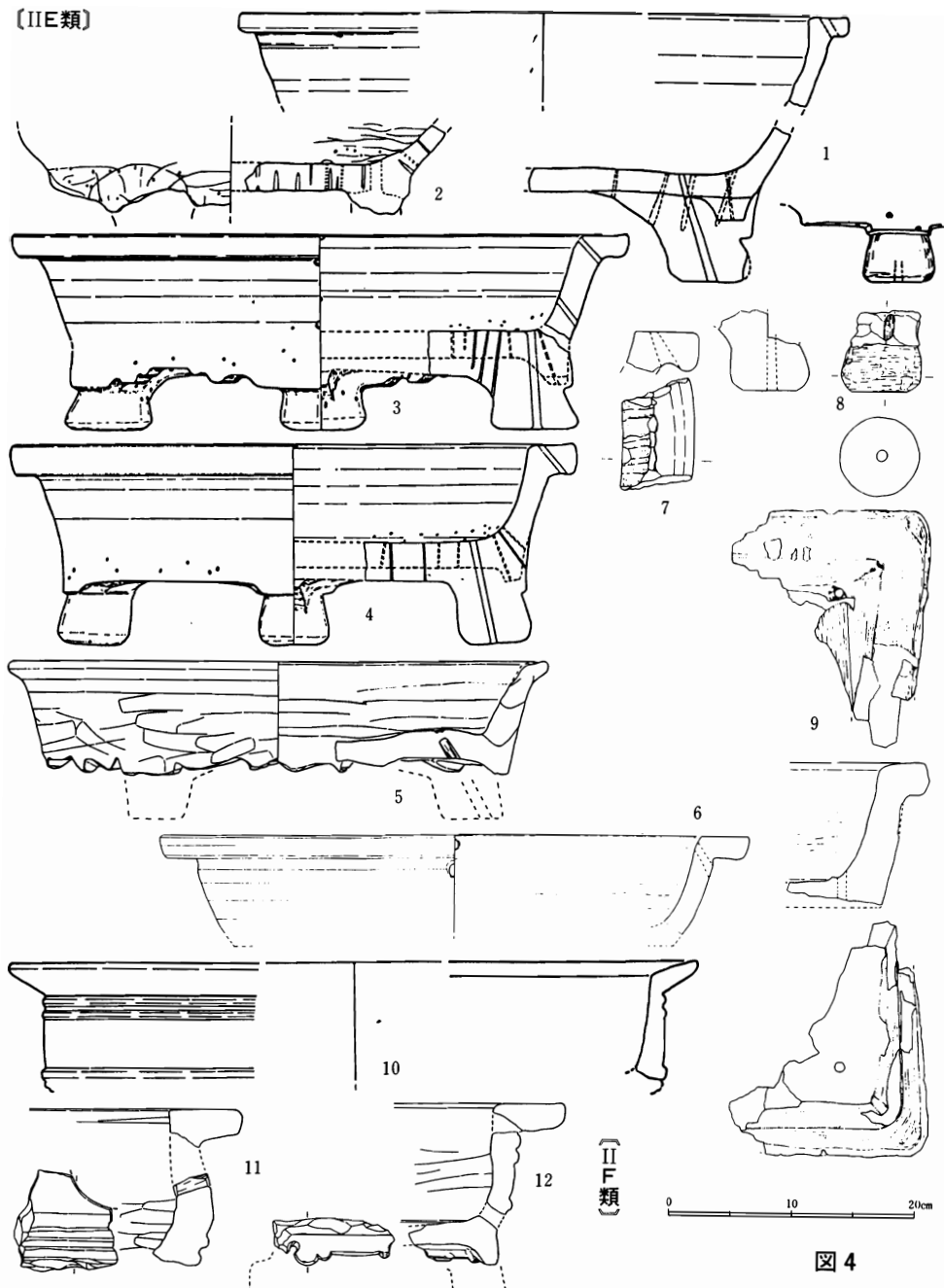
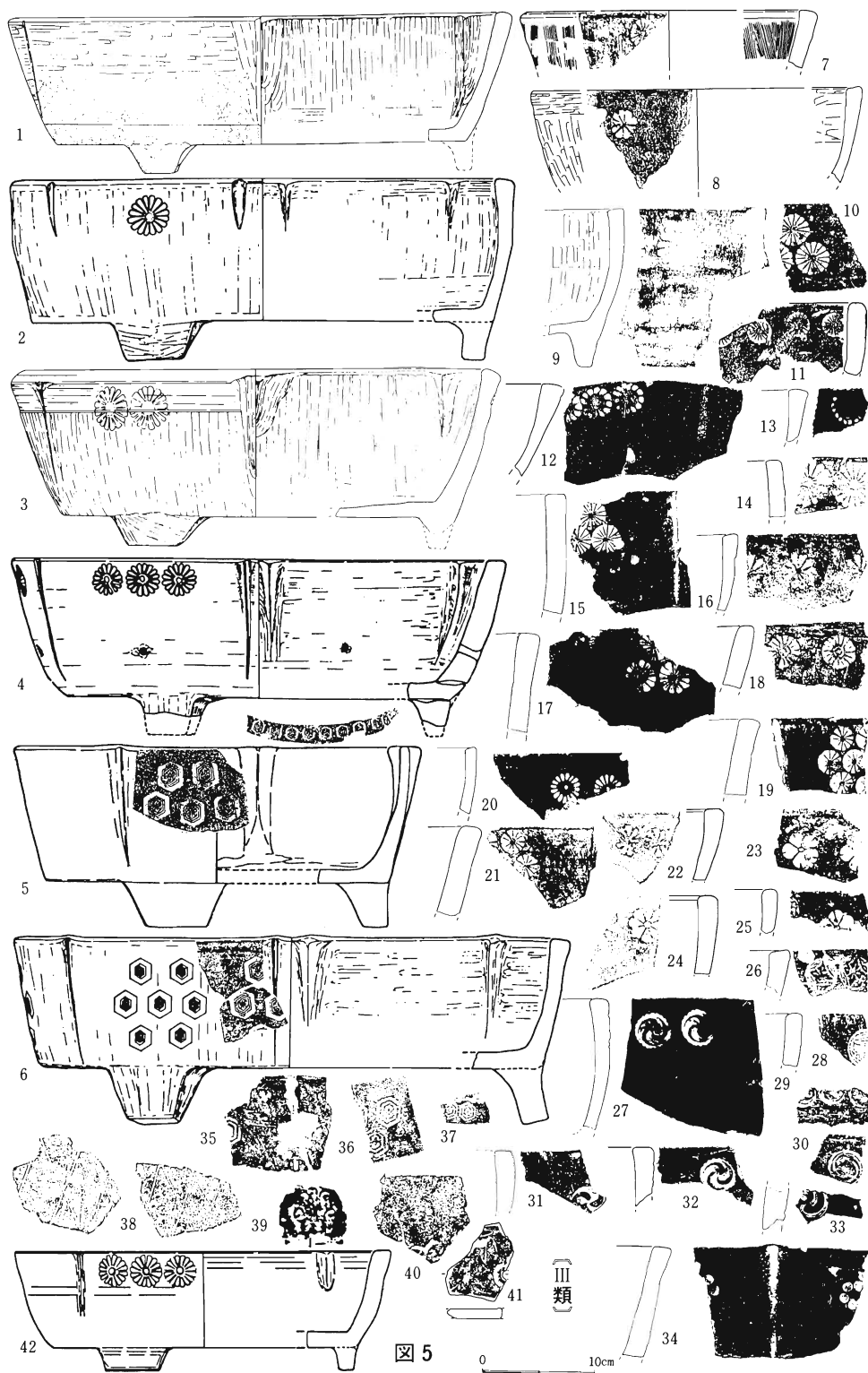


図 4

そうである。凸帯文はⅤ類の火鉢に顕著だが、ⅡF類の年代はそこまで降らない。出土量はまだごく僅かで、ⅡE類との区別などはもう少し資料の増加をみないとわからない。



(4) Ⅲ類 (図5)

概して瓦器質で輪花状(六弁と思われる)を呈し、大型のスタンプを胴上部に配し、逆台形の板状脚(三脚)をもつ一群である。図5-7のように輪花状にならないものもあるかもしれない。この群は細分しようにもその手がかりに乏しい。胎土は、ⅠB類に似た粗砂交り軟質土器ふうのものから、軟質礫を含む粗胎の瓦に似たもの、瓦器に似て粉質でチョークのような感じのものまで、変差が大きい。しかしいずれの土で作られたものも器面に磨きが施され、特に胴の縦方向の磨きが顕著で、器表は黒色処理することを基本としている。すなわち、まったく瓦器的な土器といえる。京都で使われていた火鉢を、鎌倉で模倣したのではないと思われる。底板外面は砂底で(この点西国とは異なる)、板状脚との接着面には粗いひっかきを加える。内底には38, 39のごとき斜格子暗文を入れたものが目立つ。スタンプ文は菊花文が多く(実に変差が多いが)、六弁輪花の各弁中央に1個~数個を捺す。少数ながら桜花文や亀甲文、三巴文などもあり、西国のものより多彩といえる。異種文様が同一個体に捺されることはなさそうである(文様の集成や同范関係の検討はまだなれていない)。鎌倉での出土量はほぼⅠB、ⅠC類に相当するほど多く、鎌倉時代後期以降に置き火鉢が家屋内に定着したことがわかる。

(5) Ⅳ類 (図6, 図7-1~12)

概して瓦器質で、沈線間の小型スタンプ文と連珠貼付文を特徴とする一群である。A, B類とした扁球胴の一群と、C類とした鐙をもつ一群とは別類にした方が良いのかもしれないが、共通した要素もあるので、今回はあえてこの群に括っておいた。

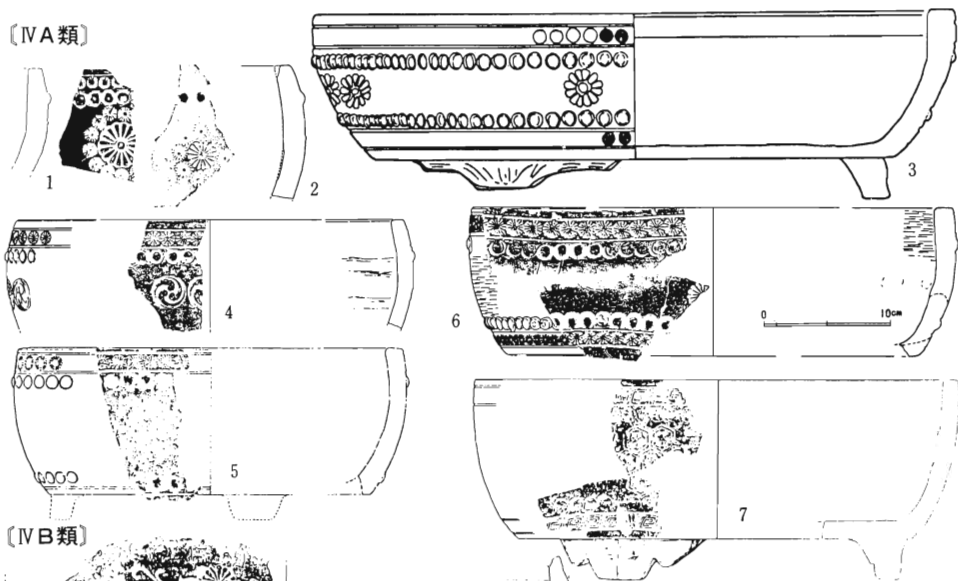
ⅣA類 (図6-1~12)

扁球状の胴部と肘木ふう飾りの付く板状三脚を有し、口唇端は角張り気味の直口である。胎土は瓦器的な粉質のものから軟礫を含む瓦的なものまでやや幅があるが、焼成は軽く硬めで、土器的なものはまず無い。器表はきわめてよく磨かれ黒色処理され、光沢をもつものも多い。スタンプは口縁と底脇の横位沈線帯間に、小型のものが密に捺される。小型の菊花文が多いが、雷文、三巴文、花菱文、木瓜文などもみられる。その胴寄り下、上側に連珠貼付文がほぼ例外なく付されるようである。連珠文帯間の胴中位に大型の(ただしⅢ類に較べると作りのこまやかな)スタンプが捺されるものもある。二種類以上のスタンプが併用されることもまれではない。底板内面はナデで暗文は入らず、外面は砂底である。鎌倉での出土量はⅢ類に比して激減し、市街地100㎡当り数片といったところで、寺院址に出土の中心が移りそうである。

ⅣB類 (図6-13~17)

外観はⅣA類とさして変わらないが、口縁上端がほぼ水平となり、端部が内方へ引き出される形をとる。この口縁形態はⅥ類に顕著で、何らかのつながりが考えられる。脚はⅣA類より小ぶりで退化したものになりそうだ。胎土はほぼ瓦器質だが、表面の色調に近世

【ⅣA類】



【ⅣB類】

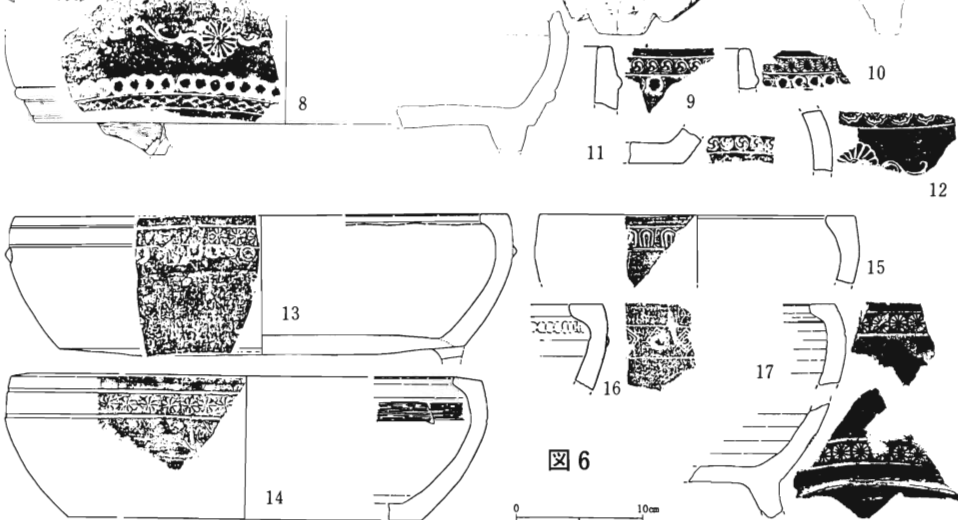


図 6

鉛瓦と似た光沢をもつものがみられる。沈線帯間に小型スタンプを並べるのはⅣA類と同じだが、胴下部のスタンプ帯がなかったり、連珠文帯が省略されたり、全体にⅣA類より後出の退化した一群と考えられる。出土量はⅣA類より更に少なく、Ⅴ・Ⅵ類同様に寺院関係の場所でごく少量出土するにすぎない。

ⅣC類（図7-1～12）

浅鉢形の胴の口縁下に広く厚い鰐を付けた一群で、鰐部を中心にスタンプ文を施す。器形の類似からひとくくりにしたが、1, 2, 12のような単純な鰐付き鉢と、3, 8のような細かい装飾をもつものは系譜を異にする可能性がある。いずれも胎土は瓦器質か瓦質で硬い焼きだが、前者の中には土器に近い砂混り胎土で軟質のものもある。器表は磨かれ黒色処理されるが、後者では黒色化せず銀灰色を呈するものもある。スタンプ文様は大きめ

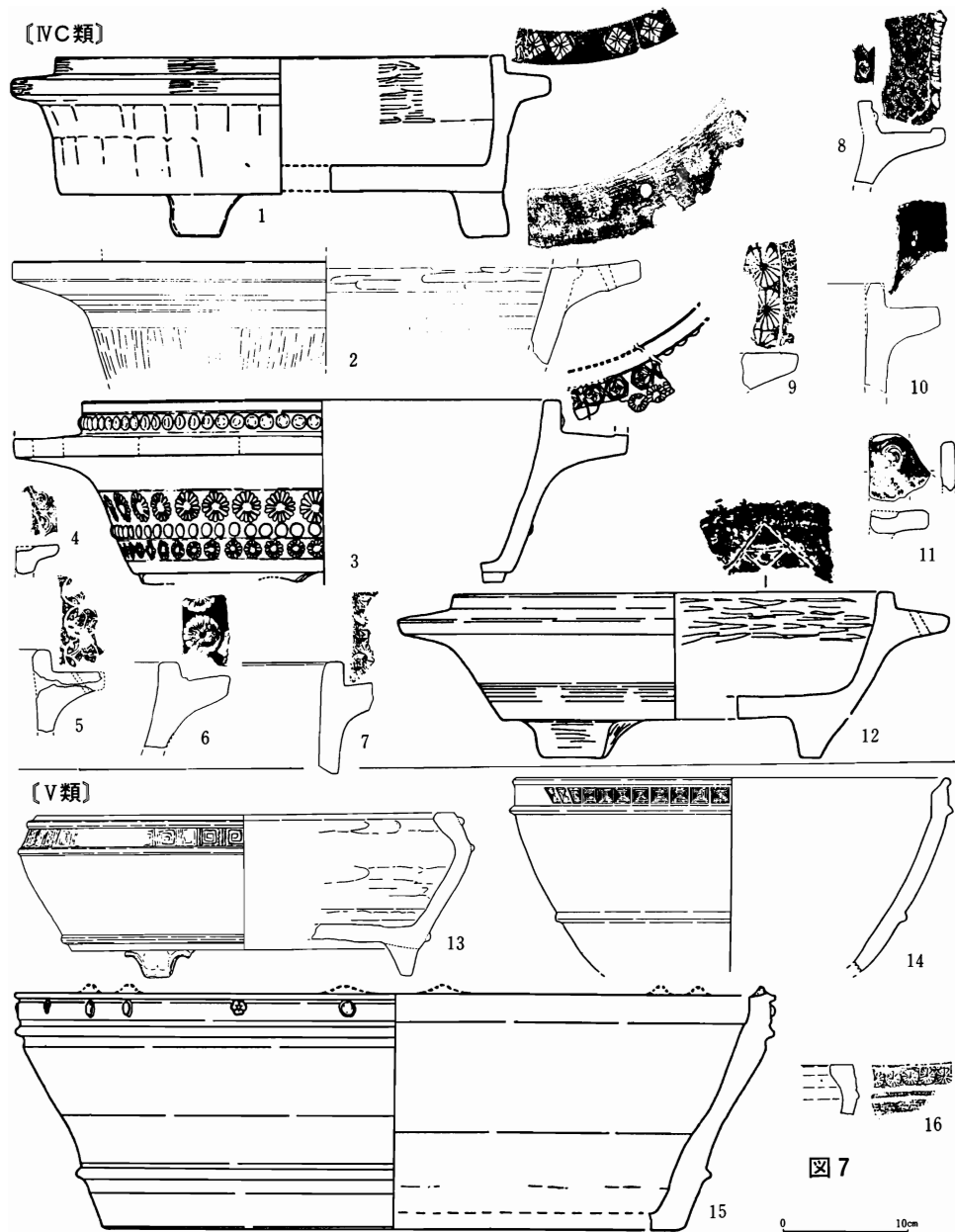


図 7

の菊花文や花菱文を罫上に一列に捺したものから、大小の組み合わせまで多彩であり（異種スタンプの組み合わせがあることはⅢ類と異なる）、かつ3、8のように連珠貼付文を伴うものもある。あるいは、Ⅱ類の中に成立した罫付き的な器形がⅢ・Ⅳ類の製作者に引きつがれ、それぞれの施文法で似た製品を作り出していたとも考えられるが、後述の同範スタンプをもつ例（図11－3、4）が異なる胎土であることからすると、同一製作集団による一群の製品の中の変差の範囲内と考えられなくもない。鎌倉での出土量はⅣA類よりや

や少ないくらいであるが、市街地での出土もかなりある。

(6) V類 (図7-13~16)

凸帯文をもつことを特徴とする一群である。口唇外端とその下に凸帯がめぐり、その間に雷文や三巴文(巴の頭は膨らむ)のスタンプを配し、胴下部に一本の凸帯をめぐらすのが基本のようだ。胎土はやや粗く、瓦器質というより瓦に近いが、器表は磨かれ滑らかである。13, 16のようなIV B類から発したようにみえる扁球胴のものと、14, 15のような開いた鉢形のものがあり、二群に細分すべきかもしれないが、いまだ例数に乏しい。この他に玉縄城では角鉢形のものも出土している。⁽⁴⁾鎌倉での出土量はごく僅かで、一応類設定がしうるという程度である。

(7) VI類 (図8-1~4)

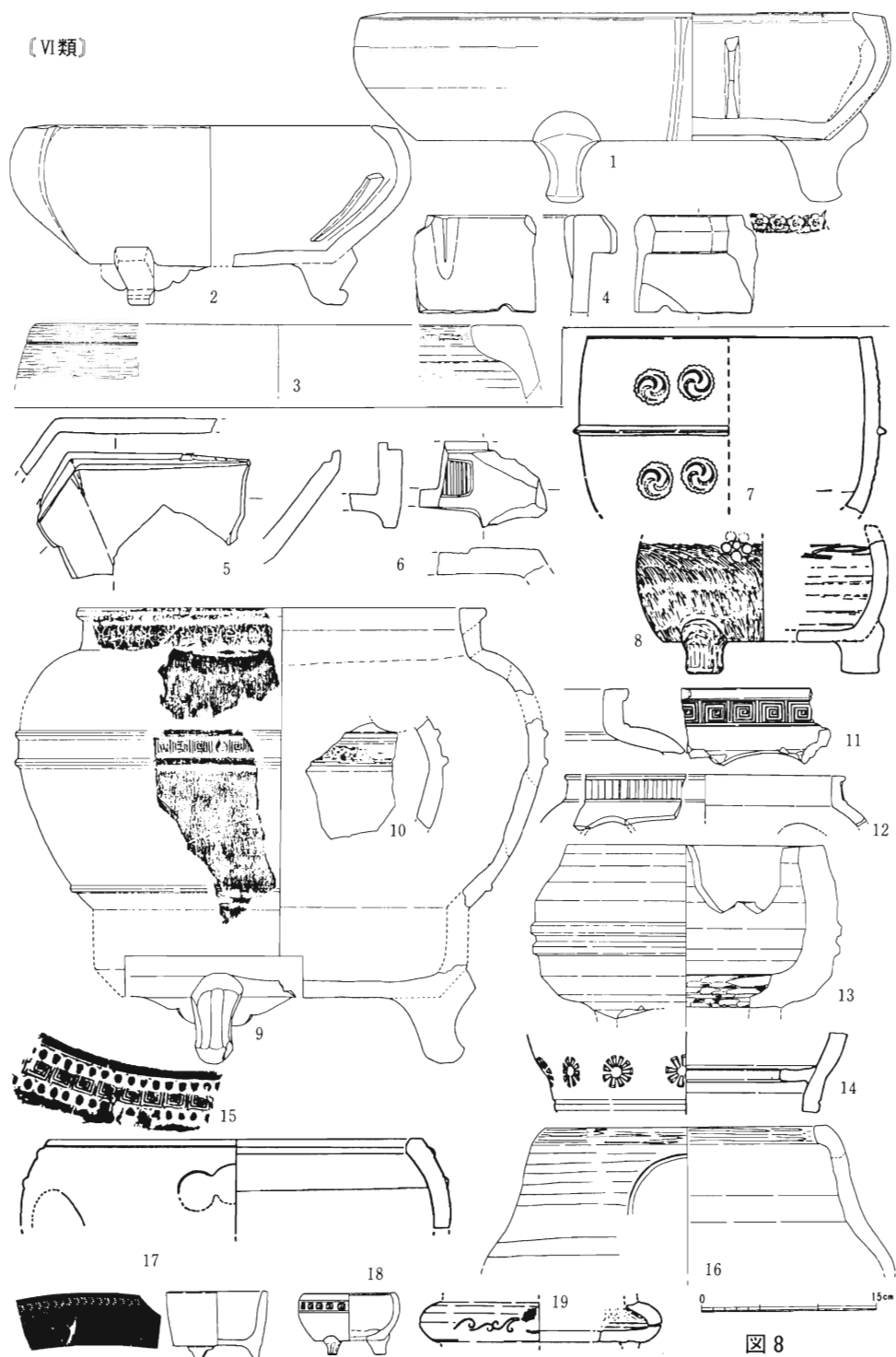
IV B類の文様を失ったものといえるかもしれない。扁球胴で口縁は水平に内に張り出すが、脚は獣脚系統の形になる。また内部に強化のためか、縦の肋状貼付を付すことも異なる。胎土は白っぽい粉質で、器表はよく磨かれにぶい光沢ある黒色を呈する。最も似た焼きものとしては近世鉛瓦があげられようか。図8-4は角形で口縁外面に小スタンプを有するが、内面に肋状貼付をもつのでこの類に入れておく。図8-1, 2のような形は近世江戸遺跡でも見られるようであり、近世につながる一群とみなしうだろう。鎌倉には中世末の資料はごく少なく、VI類は寺院でわずかに見られるにすぎない。

(8) その他の参考品 (図8-5~9)

火鉢などというものは、一戸の家でそう多くの個体数を消費できるものではなかったろうから、生産量もたいしたことはなかったろう。火鉢だけを専門的に作っていたのでは、土器工人たちの生活は成り立たなかったろうから、火鉢以外の製品を併せ生産した可能性を考えてみる必要がある。瓦質・瓦器質の製品で鎌倉の火鉢と同系の工房で生産されたと考えられるものには、香炉や土風炉類があげられる。図8-7, 8のような小型手焙りとも香炉ともつかない形のは、Ⅲ類あるいはIV A類の火鉢生産者が作り出した異形品かもしれない。9~12のような典型的な土風炉は、凸帯文間に雷文などの小型スタンプを捺しており、V類との共通性がうかがわれる(もちろん器形のおこりは西国にあり、奈良火鉢でも両形の生産がなされているようだ)。そうすると13~16のような異形の土風炉も火鉢との関連を考えてよいかもしれない(13は土器質ゆえにⅡ F類の、14は大型スタンプからⅢ類の、15は文様からIV A類の、16は無文ゆえVI類の火鉢に対応するか)。ただこれらの品はあまりに特異で、例数(出土量)がきわめて少ないため、現時点では結論は下せない。

⁽⁵⁾
小香炉類についても、小型スタンプ押捺や連珠貼付文などからIV A類の火鉢と関連づけうるが、このような形態は西国の瓦器の中に早くから見られるものであり、また東国でも火鉢とは別系統ではないかと思われるほど広範囲で(少量ながら)出土していて、必ずし

〔VI類〕



☒ 8

も鎌倉の火鉢に関連させる必要はないのかもしれない。図8-5, 6は六角ないし八角形の火舎香炉のたぐいと思われるが、類例に乏しい。香炉以外にも瓦器質製品では燭台などが見られるが、そこまで手を広げると推測ばかりになってしまうので、将来の問題として残しておくこととする。

4. 鎌倉出土の火鉢の編年

火鉢は生産個体数がそう多くなかったろう上に、消費地での廃棄は割れた破片の散乱といった状態になるので、一括資料をもとにした編年作業などは望むべくもない。さらに鎌倉の遺跡の土層は、前代までのゴミ（遺物）をまき込んだ土が移動させられていて、遺構（覆土）出土品の一括性はまず信用できない。そうした状況下で火鉢の編年を試みるとなると、ある程度時間幅のある包含層出土品を形式的に配列することと、発掘現場での体験的（感覚的）判断にもとづかなければならなくなってしまう。ここで述べる編年観もかなり感覚的なもので、将来良好な一括資料が出てくるならば、訂正されてしかるべきものであることを初めからことわっておく。

さて、鎌倉における火鉢の起源はというと、これははっきりしない。少なくともかわらけのⅠ類⁽⁶⁾に伴う形での火鉢は、これまで知られていない。市街地の遺跡をざっとみわたしてみると、13世紀中葉頃にⅠ類のA～Cが確立するように思われる。今小路西遺跡（御成小学校内）でも中世第3・4面あたりまではⅠ類が大部分を占めており、ⅠB・ⅠC類の年代を13世紀中葉から14世紀前葉に置けそうである。ⅠA類は新しい層からの出土がみられないようなので、少し先行する可能性がある。ⅠD類はⅢ類に近い技法が使われており、14世紀に降らせた方がよさそうである。Ⅰ類は鎌倉の火鉢の初源ではあるが鎌倉独自に成立したものではなく、京都で使われていた瓦器の中の一形態（鉢または洗）がモデルになっていると思われる。

Ⅱ類は多彩な内容をもつが、ⅡE類の円柱脚片が御成小学校内第5面で出土しており、13世紀中葉にはⅠ類を追うようにして生産が開始されていたと思われる。おそらくはⅠ類の生産開始を見たかわらけ製作工人が、自分たちなりの火鉢作りを始めたのだろう。その際に置き火鉢を作ったことは、そのモデルの有無を今後探らねばならない。Ⅱ類をかわらけ工房の産品とするならば、その盛期は13世紀後葉から14世紀中葉に置けるが、南北朝期に降ると思われるものはⅡE、ⅡF類くらいで、意外に短い時間の所産であったのかもしれない。

Ⅲ類の破片は御成小学校内の中世第4面には出土しており、Ⅰ・Ⅱ類にそう遅れることなく生産を開始したと思われる。しかし最もシェア獲得に成功したのは、Ⅰ類衰退後の14世紀中葉を中心とした年代と思われる。これは消費者の好みによる変化ではなく、火鉢を

年代 類別		1250	1300	1350	1400	1450	1500	1550
I 類	A							
	B							
	C							
	D							
II 類	A							
	B							
	C							
	D							
	E							
	F							
III 類								
IV 類	A							
	B							
	C							
V 類								
VI 類								
土風炉								
小香炉								

表1 各類火鉢の存続年代

板床に置くという生活様式（住居様式）の変化によるものと思われる。むしろこの類のモデルとなったであろう西国の瓦器火鉢の年代が、どれだけ遡るか気になるところである。

IV類も、IV A類の出現は早くも13世紀の末頃にはありそうだが、盛行期はおくれる。おそらくはIII類を駆逐しつつ、14世紀後葉～15世紀前葉がピークと思われる。IV B類はA類の簡略化であると考えられるが、15世紀中葉頃にピークがあるのではなかろうか。IV C類のうち大型のスタンプのものはIII類と併行する14世紀前～中葉に、小スタンプをもつものは同末～15世紀に降りそうである。III類とIV類は同じ機能をもつ器であり、盛行の前後関係はあるものの、併行する時間もかなりあったと思われる。出土量の差からすると、鎌倉の人口の激減する14世紀末～15世紀前葉の後に、IV類の盛期があると思われる。

V類は15世紀に入っでの出現と考えられる。御成小学校内第5次調査出土の図7-13などは、伴出遺物から15世紀中葉かもう少し降る年代を与えられそうである。一方玉縄城出土の角火鉢は確実に16世紀代に降ると考えられ、この類の年代位置を示してくれる。奈良火鉢もIVB類やV類は15世紀からの年代になりそうだし、また各地の凸帯文をもつ土風炉も15世紀以降になろうから、V類の年代もほぼ絞られてこよう。

VI類をIVB類の無文化ととらえるならば、あるいは15世紀代に始まっていたかもしれないが、鎌倉出土のものは八幡宮廿五坊出土例の伴出かわらけを見ても、16世紀以降とみた方がよさそうである。下限は近世にずれ込みそうだが、このあたりは鎌倉に資料が少なく、他地域で解明されることを期待したい。

以上のように漠然とかつ感覚的な年代観を表1にまとめておいた。各類の間には併行する時間がかかなりあるが、これは火鉢が一系的な型式変化をおこす土器ではなく、複数の工房が異なる製品を生み出し、時にはシェアを競っていたことと理解したい。鎌倉においてはこれ以上に年代を絞り込むことは、よほど良好な層序や一括資料に恵まれない限り困難で、東国各地で少量ながら出土する火鉢とその伴出遺物を、今後詳細につき合わせてゆく必要があろう。

5. 火鉢の使われ方

遺跡から出土する土器火鉢は多くが破片になって捨てられたものであり、家屋内での使用状況を示すような出土例は鎌倉でもごくまれである。そこで極めて安易な方法ではあるが（また多くの先学の行なったところでもあるが）、絵巻物資料により火鉢の性格を考えてみたい。もちろん現存する絵巻物の画家たちは畿内西国の人々であり、本稿のごとく東国の考古学資料に直接あてはめる危険性は承知しておかねばならない。ただし、分類の項でも少しく触れたように、鎌倉の火鉢は京都で使われていたものをモデルとしていたようであるから、まったく的はずれとはならないはずである。図9・10は筆者がざっとあさったところで目に付いた火鉢類の絵で、土風炉と香炉類は含めなかった。

図9-①～⑪はいわゆる「火桶」であって土器火鉢ではない。清少納言が『枕草子』の中で「火桶の炭も白き灰がちになりてわろし」と言っているのはこのたぐいであろう。木芯の塗りものか巨木を削りぬいたものと思われる。家屋内の板敷部分に置かれ、内部に灰（あるいは砂）を入れて炭火を保つところは、火鉢と用法の上で変わりはない。ただ考古学的な遺物としては残りにくいものだろう。

⑫は12世紀後葉成立の『信貴山縁起』に登場する、土器火鉢の最古の例と思われる。尼公が旅の途中で一夜の宿を借りた寺の坊の一角に描かれている。曲物の中に丸浅鉢形の火鉢が納められ、火箸も二本そえられている。⑬～⑮は外見は塗りの火桶であるが、中に丸

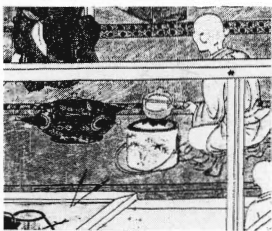
A. 持ち運び式の火桶



① 慕婦絵詞巻二

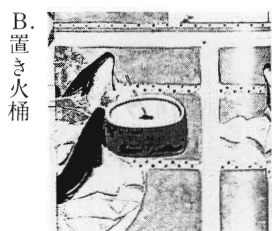


② 慕婦絵詞巻九



③ 慕婦絵詞巻十

B. 置き火桶



④ 西行物語絵巻



⑤ 春日権現験記絵巻十六

C. 大型の火桶

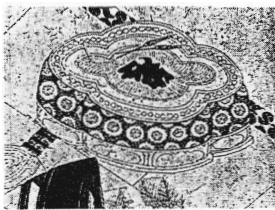


⑥ 法然上人絵伝巻十二

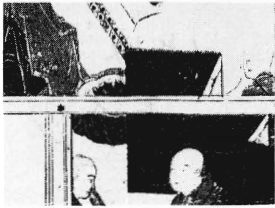
D. 長円形の火桶



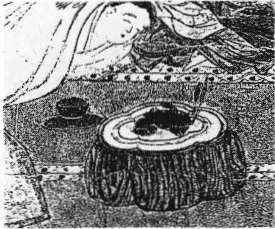
⑦ 枕草子絵詞



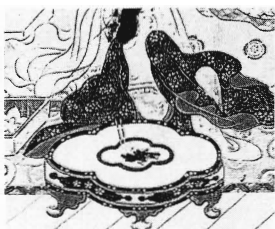
⑧ 枕草紙絵詞



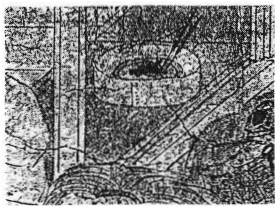
⑨ 法然上人絵伝巻廿七



⑩ 稚児観音縁起

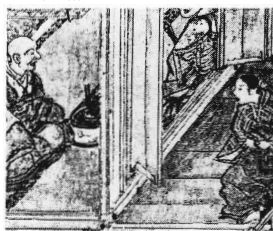


⑪ 彦火々出見尊絵巻五

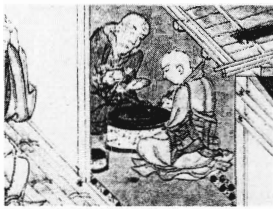


⑫ 信貴山縁起

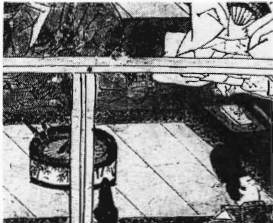
H. 火桶内の火鉢



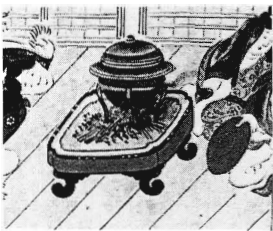
⑬ 法然上人絵伝巻五



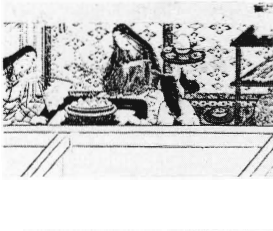
⑭ 慕婦絵詞巻四



⑮ 慕婦絵詞巻五



⑯ 彦火々出見尊絵巻



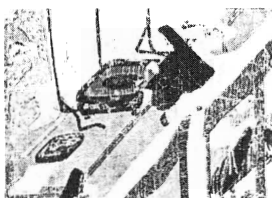
⑰ 石山寺縁起巻五



⑱ 信貴山縁起

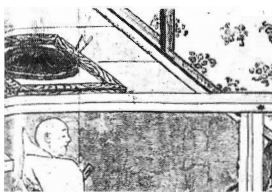
図9 絵巻に見る火鉢(1)

K. 角火桶に丸火鉢



①9 北野天神縁起卷三

M. 囲炉裏に丸火鉢

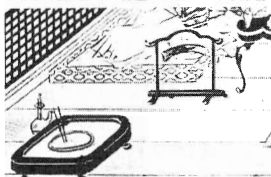


②4 慕婦絵詞卷五

O. 画工の火皿

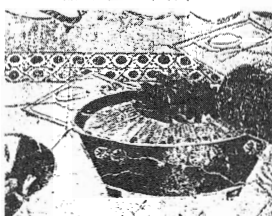


②9 弘法大師行狀絵詞卷四



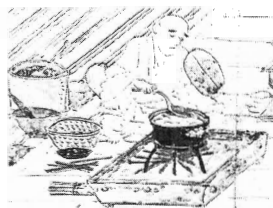
②0 西行物語絵卷

N. 土器の置き火鉢

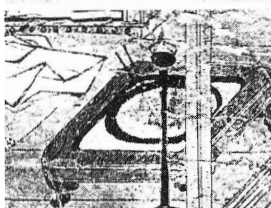


②5 絵師草子

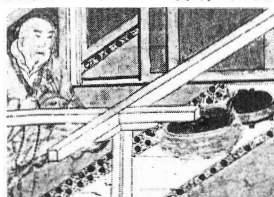
P. 火炉としての角火鉢



③0 慕婦絵詞卷二



②1 西行物語絵卷

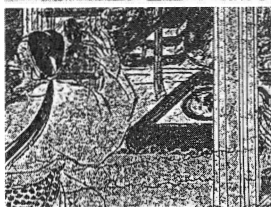


②6 慕婦絵詞卷三

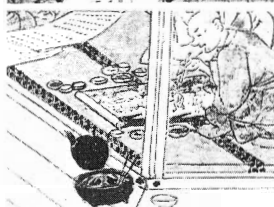
Q. 土器火鉢を植木鉢に



③1 慕婦絵詞卷一

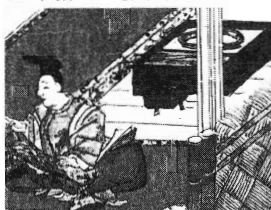


②2 信貴山縁起



②7 慕婦絵詞卷五

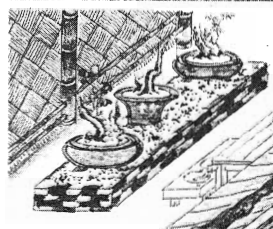
L. 火炉に丸火鉢



②3 弘法大師行狀絵詞卷一



②8 慕婦絵詞卷八



③2 弘法大師行狀絵詞卷一

図10 絵巻に見る火鉢(2)

火鉢を据え込んでいるように見える。どうやら丸浅鉢状の土器火鉢は何かの中に据えられて使われていたようである。①9～②4でも丸火鉢は角火桶や火炉内に据えられている。これらの丸火鉢は鎌倉のⅠ類としたものが相当すると考えられる。Ⅰ類の火鉢は多くのものが口縁内面に火熱を受けた痕跡を留めており、鉢内で火を焚いたことが歴然としている。鎌倉の若宮大路の西側、北条時房・顕時邸遺跡（鶴岡旅館地点）では、長屋ふうの複室の板壁掘立柱建物の一室の囲炉裏跡に、ⅠA類と思われる火鉢の底部が座った状況で検出されており、丸浅鉢形の火鉢の使われ方を知ることができる（ただし全てのⅠ類が“埋設火皿”であったと極端に考えることは避けるべきだろう）。

②⑤は有名な『絵師草子』の酒宴の場面に描かれるもので、輪花形でなく丸形に描かれてはいるが、側面に2個ひと組みの大型菊花文スタンプが表現されていて、Ⅲ類に相当すると考えてよかろう。鎌倉のⅢ類は京都で使われていた形を模したと思われるので、絵巻の年代（建武新政頃か）に京・鎌倉にこの手の火鉢があって良いわけである。②⑥～②⑧は樽胴（扁球胴）形で小さめのスタンプが表現されており、さらに色も紫色系に塗られ、瓦器質のⅣ類（とくにⅣA類）をあらわしたと考えられる。Ⅲ・Ⅳ類は板状の三脚を付け、外側面に文様をもつことから、絵巻に見るように板床にじかに置かれたものであることは明らかである。②⑥ではごていねいに脇に炭桶まで描き込まれている。

こうした火鉢には（火桶でもそうだが）火箸が付きものである。鎌倉でも鉄製で茎（なかご）をもち木の柄の付けられる火箸（一見鉄鏃のように見えるが刃部は無い）や、把む部分を捻った火箸が、いたる所で出土している。兼好法師は『徒然草』第213段で、

「御前の火炉に火をおく時は火箸してはさむことなし。^{かはらけ}土器よりただちに移すべし。されば転び落ちぬ様にこころえて炭を積むべきなり。^{やはた}八幡の御幸に供奉の人、浄衣を着て手にて炭をさされければ、ある有職の人、「白きものを着たる日、火箸を用ひる苦しからず」と申されけり。」

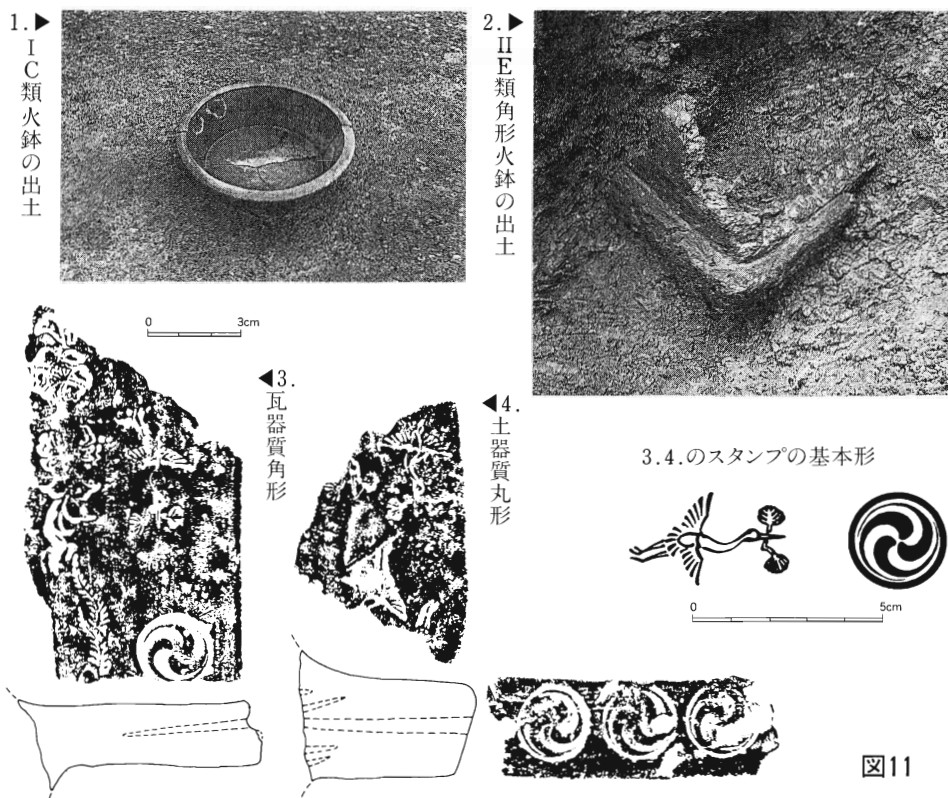


図11

と書いており、炭のつぎ方までわかって面白い。

なお、㉗、㉘は絵を描く場に火鉢が登場するもので（㉘は中国の様子を描いたものだから、青磁のような青色の鉢を用いている）、顔料が何かをあたためるための火に、持ち運び容易な火鉢が使われたことを示している。火鉢の用途を「手焙り」とか暖房用に限定する必要のないことを示してくれよう。

また㉙と㉚では、胴部に縦長のスリットの入った“あんか”状の火鉢が描かれている。西国はいざ知らず、鎌倉ではこの形の土器は今のところ知られていない。

㉛は、中世の調理の様をよく示す資料としてとり上げられることの多い、『慕婦絵詞』巻二の南滝院の厨房の場である。五徳を据える角形の火炉は側面にスタンプ文らしきものが描かれ、四隅に脚があってどうやら土器の角火鉢と思われる。スタンプ文様からはⅢ類とみなせるが、鎌倉での角形火鉢出土例は、Ⅱ類とⅣ類以降にしかない。しかし火炉としての大型火鉢があることは確かで、その例として今小路西遺跡（御成小学校内）北谷3面出土のものをあげる（図4-9、図11-2）。これは、最高級の武家屋敷の奥座敷（後世の「会所」ともいうべきか）たる礎石建物の傍にあった方形土壇とそのすぐ外の溝から、強い火熱にあってバラバラになった角火鉢が出土したものである。方形土壇は奥座敷での宴会などのために酒肴を調える厨房とみなせ、内部には焼けた石材などが散乱していて、ここに角火鉢が火炉として据えられていたことと思われる。

㉜、㉝は土器火鉢が植木鉢（盆栽）に転用された様を示すものである。㉜の両側のものはⅣ類らしい扁球胴に描かれるが、中央のものはⅢ類ともⅣ類ともつかない、鎌倉には見られない器形である。㉝は成立年代の降る絵巻物資料で、Ⅳ類というよりはⅥ類に近いのではないと思われる。絵の描かれた時代に存在した火鉢を忠実に写したともいえるし、三個セットの盆栽棚という様式化したものともとらえうるが、火鉢が植木鉢に転用されることが確かにあったわけである。先に触れた御成小学校内の北谷三面では、大棟に瓦を使用した建物（平安貴族の寝殿建物に相当しようか）が取り払われた跡地が貝混り海砂敷きの庭にされており、そこにⅠC類の丸火鉢が正位置で置かれていた（図11-1）。この火鉢は焼成時に底にヒビが入ったようで、底板の片側が橙色を呈しており、容器としては底ぬけの状態になっていたものである。それが庭にポツンと置かれていたことからすると、植木鉢に転用されたとみてよからう。

こうして見てくると火鉢という名称で括れる土器も、使用者によって様々な使われ方をされたことがわかる。生産者はある決った形の土器を生産するが、使用者は自分の側の事情でそれらを使い分けるのである。これが古代までの土師器とは異なる、“商品”としての中世土器のあり方であろう。同様のことはかわらけについても言える。かわらけを「一回限り使用の清浄な食器」と位置付けることは誤りではないが、灯明皿にも呪物にもいかようにも使いうるのである。甕の底部はいつでもこね鉢に転用しうる。土器を考える際に、

用途まで考慮に入れて型式設定と編年を立てることは、中世以降の段階では通用しないであろう（もちろん、ある用途をめざした製品が作られることもあるのだが）。火鉢についても、その生産のあり方は“土器生産”として別にとらえ、使用され方は消費地遺跡でまかに探っていくしかあるまい。

6. 火鉢の生産をめぐる

鎌倉では大量の火鉢が消費されているが、その生産工房址はこれまで検出されていない。これはそのまま“奈良火鉢”を搬入していたという議論にはならないことは、先の分類と編年で見えてきた通りである。鎌倉の火鉢は中世前期には、大消費地鎌倉へ向けての在地生産品であったはずだ。しからばどのような生産体制があったかとなると、消費された品から推測するしかない。分類の項でも述べたように、火鉢の胎土・焼成・整形技法は多彩で、複数の製作集団のあったことがうかがえる。特にⅡ類としたかわらけ質の火鉢は、鎌倉に膨大な量の土器を供給していたかわらけ工房において、副次的に生産されたものと思われる。鎌倉のかわらけは鎌倉以外の地方へ搬出されたり波及したりする力がなかったようで、Ⅱ類の火鉢も鎌倉以外には見られないし、生産量も専門家とは思えないなど少ない。また生産した品も多彩というより、的が絞れずあれこれ手を出したという印象である。

すると問題なのは、徹底的に“浅鉢”という器種を作ったⅠ類の生産者の性格である。Ⅰ類の内部の差異はⅠB・ⅠC類間の胎土・焼成である。ある見方をするならば、同一の技法をもった者が、質の異なる粘土を前にして、ちょっとした口縁の違いや指の力の入れ具合を変えたとも考えることもできよう。Ⅰ類を生み出すような土器生産集団は、鎌倉の在地の者の中には見出せない。まったくの憶測になるが、こうした焼きものを生み出せる力をもつとすれば、それは瓦の生産者ではないだろうか。鎌倉には次々と寺院が創建されており、多数の瓦工人が集められたと思われるが、彼らの中にどこかで“瓦陶兼焼”のあることを知る者がいて、瓦作りと共に（その間に）火鉢に手を出してはいなかっただろうか。鎌倉の寺院の瓦にも胎土・焼成が火鉢Ⅰ類に似たものがある。胎土分析等の手法で探ってみる必要がある。

これらに対し、Ⅲ類、ⅣA・B類、Ⅴ類などの火鉢は、西国の瓦器火鉢に範をとっているように思われる。しかし整形技法などは西国と同一ではなく、モデルを求めるものの鎌倉向けに鎌倉周辺で生産されたものと思われる。これらの類の生産者は、かわらけ工房や瓦工房には求められそうにない。西国で瓦器大型製品を作っていた者の移入か、技術習得者の流入による新系譜の工房の成立を考えねばならない。特にⅢ類が細分しえないほどまとまった製品内容を持ち、まとまった量を生産していることは驚きでさえある。東国各地でⅢ類の出土がごくまれなのは、一つには鎌倉に向けての工房の成立段階にあったことを

も表わしているのではなかろうか。Ⅳ類は瓦器質のものとしてⅢ類より質の高い製品であり、Ⅲ類を追いつくべく競合する工房が生産に拍車をかけたのではないかと想像される。ところがⅣA～ⅣB類の盛行する時期は、運悪く鎌倉は都市としての衰退期に当り、火鉢の需要者は減ってしまう。東国各地でⅣ類以降の火鉢の出土が増えるのは、火鉢の需要層である武士や僧侶、富裕商人層が、各地に分散したことによるであろう。Ⅳ類以降の火鉢生産者はあるいは鎌倉周辺に留っていたかもしれないが、生産地を他に移した可能性も考えられる。Ⅴ類、Ⅵ類および土風炉の鎌倉でのあり方は、寺院や残存武士居館などに少量みられるだけで、それだけのために火鉢生産者が鎌倉周辺に居残ったとは考えにくいところがある。やはり東国のどこかに移って、鎌倉も含むより広い流通圏を確保しようとしたとみる方が妥当であろう。この辺のことも、同類の火鉢の胎土分析などで、近い将来明らかにしうるであろう。

以前にも触れたことはあるが、⁽¹¹⁾図11-3、4が同範スタンプを施文していながら、器形(丸形と角形)、胎土(土器質と瓦器質)に差があることは、火鉢の製作者が(生産個体数の少なさゆえにか)あまり土を選ばなかったのではないかという疑問が残る。少なくとも肉眼観察の限りでの土器の質の差がある以上、生産者の差を考えたのが考古学徒の常である。各類の時間的推移と生産者をめぐる推論も、異質の製品が同一工房で作られている(極端に言うなら、一ヶ所で土器屋も瓦器屋も共働しているとか、素地作りとスタンプ捺しが分業化している)としたら、夢想以外の何ものでもなくなる。やはり製作工房址の検出と、製品の胎土分析を急がねばならないだろう。

7. まとめにかえて

「火鉢」というある“用途”を示す言葉で一種の土器をくくったため、論点が錯綜し、それを充分解きほぐせたかどうか自信はないが、少なくとも鎌倉には“火鉢”といってくる土器があり、ある時期以降は東国全体にかかわる土器になることは、わかっていたできたことと思う。

鎌倉の火鉢の初源であるⅠ類は、何か別の容器に入れられるか、板床上に火炉を据えるか、床から切りおろした囲炉裏に埋設されるかして使われるようだ。つまりそのような火処をもつ住居形態によって需要される土器であった。これが鎌倉に多くあって東国各地に見られないことは、鎌倉の「都市住居」が東国の農村社会の中からもたらされたものでなかったことを示してくれよう。それを武士居館の簡略化と見るか縮小密集化とみるかはともかくとして、狭い土地に長屋的な建物をつめこみ、建物の部屋(あるいはブロック)ごとに火処を設け、暖房兼灯火兼煮炊の用を足した、都市特有の器であったとさえ考えられる。鎌倉が都市として繁栄する13世紀末以降には、板の間に置く“手焙り”的な火鉢が増

加する。これは平安宮廷以来の持ち運びできる「火鉢」の再現であり、より上流志向的な器といえる。したがって鎌倉が人口集中した都市でなくなってしまうとき、寺院や武士居館に火鉢は残るものの、都市で一時的虚栄を楽しんだ“都市住居的火鉢”は消え、東国各地の寺院・城館へ上流的「火鉢」である置き火鉢のみが拡散してゆくこととなったのであろう。このように考えるならば、在地の農民層に鎌倉の火鉢が広まらないことも理解できるのではなかろうか（同様のことは陶磁器やかわらけについても当てはまるだろうし、近世に至っても東国の農家で火鉢の使用はごく限られている）。もし東国でⅢ類までの火鉢を出土する所があれば、鎌倉との強い関係を想定しなければならないし、Ⅳ類以降のものを見るときは、鎌倉をも一消費地とみるくらいの広い目をもたなければならなくなる。県考古学会誌上を借りて、あまりなじみのない中世鎌倉のことを長々と書いたが、鎌倉の特異性がわかってしまえばそれを東国の中に位置づけることはできやすいわけで、火鉢という土器の一部からでも東国の中世を考える端緒になればと願っている。

註

- (1) たとえば、拙稿「家の中の火」(『よみがえる中世3－武士の都鎌倉』, 平凡社, 1988) や、同「鎌倉の搬入土器と在地土器」(『中近世土器の基礎研究Ⅷ』, 日本中世土器研究会, 1992) など。
- (2) 挿図の出典は稿末に一括する。
- (3) 註1の1992文献と本稿とでは、Ⅱ・Ⅲ類の順を逆にしている。編年の位置を考えると、本稿での分類の方がよかろう。
- (4) 報告書未刊。『掘り出された鎌倉』, 江ノ電沿線新聞社, 1981, P. 47に小さな写真がのっている。
- (5) 本稿ではスペースの関係で小香炉類の図は割愛した。註1の1992文献で少しく触れている。
- (6) かわらけの分類についてはここで細かく触れる余裕はないが、回転台成形の最古のものがⅠ類である。拙稿「鎌倉における中世土器様相」, 『神奈川考古』第21号, 1986などを参照されたい。
- (7) 伴出遺物を含めた資料紹介が本誌に掲載されているはずである。
- (8) 中央公論社版『日本の絵巻』, 『続・日本の絵巻』よりさがした。
- (9) 鎌倉考古学研究所の斎木秀雄が提唱している町屋的建築物である。同氏「板壁掘立柱建物の提唱」, 『中世都市研究』第1号, 中世都市研究会, 1991参照。
- (10) 斎木秀雄も鉢形手焙りと囲炉裏を関連づけている。同氏「囲炉裏考」, 『中世都市研究』第2号, 1992参照。
- (11) 拙稿「スタンプが語る土器作り」, 『よみがえる中世3』, 平凡社, 1989。

挿図出典一覧

- ・(図1-1) 神奈川県埋蔵文化財センター『宮久保遺跡・Ⅰ』, 1987。
- ・(図1-2, 3) 栃木県文化振興事業団『自治医科大学周辺地区(昭和60年度埋蔵文化財発掘調査概報)』, 1986。

- ・(図1-4～7) 横浜市埋蔵文化財調査委員会「史跡称名寺発掘調査概報(第2次)」,『昭和47年度横浜市埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』,1973。
- ・(図1-8, 26, 31) 福島県梁川町教育委員会『茶臼山西遺跡, 輪王寺跡』,1991。
- ・(図1-9, 21) 川越市教育委員会『川越市天王遺跡第7次』,1992。
- ・(図1-10～14, 17～20) 韭山町教育委員会『国指定史跡「伝堀越御所跡」御所之内遺跡発掘調査報告書(予備調査～第3次調査)』,1985。
- ・(図1-15, 16, 25) 日本城郭史学会『山入城Ⅰ』,1989。
- ・(図1-22) 川越市遺跡調査会『登戸南・会下・浅間下遺跡調査報告概要』,1988。

鎌倉関係

- ・(図2-1～4, 6, 7, 図3-6, 8, 13～15, 図4-1, 10, 図5-2, 4, 6, 10, 23, 29, 30, 35, 36, 39～42, 図7-5, 11, 図8-8, 19) 千葉地遺跡発掘調査団『千葉地遺跡』,1983。
- ・(図2-5, 8, 10, 図3-2～4, 9～12, 図4-6～9, 図5-1, 3, 9, 12～21, 25～28, 31～34, 図6-1, 7～12, 図7-2, 6, 9, 10, 図8-3) 鎌倉市教育委員会『今小路西遺跡(御成小学校内)発掘調査報告書』,1990。
- ・(図2-9, 11, 13, 図3-7, 図5-37, 38, 図8-5, 6) 諏訪東遺跡調査会『諏訪東遺跡』,1985。
- ・(図2-12, 15) 「北条泰時・時頼邸跡」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3』,1987。
- ・(図2-14) 「北条時房・顕時邸跡」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書4』,1988。
- ・(図3-1, 5, 図4-3, 4) 北区鎌倉学園用地内遺跡発掘調査団『光明寺裏遺跡』,1980。
- ・(図4-2) 「政所跡」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8』,1992。
- ・(図4-5) 「若宮大路周辺遺跡群」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』,1990。
- ・(図4-11, 12) 「北条時房・顕時邸跡」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3』,1987。
- ・(図5-5, 11, 図7-1, 図8-7) 長勝寺遺跡発掘調査団『長勝寺遺跡』,1978。
- ・(図5-7, 図6-14, 15, 図7-3, 4, 16, 図8-1, 4, 10, 12) 鶴岡八幡宮境内遺跡発掘調査団『鶴岡八幡宮境内遺跡発掘調査報告Ⅱ』,1987。
- ・(図5-8) 「長谷小路周辺遺跡」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』,1991。
- ・(図5-22, 24, 図6-2) 「名越ヶ谷遺跡」,鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2』,1986。
- ・(図5-43, 図6-3, 図7-12, 図8-15) 釈迦堂ヶ谷遺跡発掘調査団『浄明寺釈迦堂ヶ谷遺跡』,1989。
- ・(図6-4) 鎌倉市教育委員会『今小路西遺跡(御成小学校内)試掘調査概報』,1990。
- ・(図6-5) 覚園寺境内遺跡発掘調査団『覚園寺境内発掘調査報告書』,1982。
- ・(図6-6) 下馬周辺遺跡発掘調査団『下馬周辺遺跡』,1992。
- ・(図6-13, 図8-9, 18) 「横小路周辺遺跡群」鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』,1990。
- ・(図6-16) 鎌倉市教育委員会『極楽寺旧境内遺跡』,1980。

- ・(図6-17) 建長寺境内遺跡発掘調査団『巨福山建長寺境内遺跡』, 1991。
- ・(図7-7) 「若宮大路周辺遺跡」, 鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2』, 1986。
- ・(図7-8) 台山藤源治遺跡発掘調査団『台山藤源治遺跡』, 1985。
- ・(図7-15) 今小路西遺跡(御成小学校内)第5次調査, 報告書準備中。
- ・(図7-14) 神奈川県立埋蔵文化財センター『裏八幡西谷遺跡』, 1984。
- ・(図7-15, 図8-11) 「浄妙寺旧境内遺跡」, 鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1』, 1985。
- ・(図8-2, 17) 「明月院旧境内」, 鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』, 1989。
- ・(図8-13) 「北条泰時・時頼邸跡」, 鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』, 1989。
- ・(図8-14) 鎌倉市教育委員会『向往柄遺跡発掘調査報告書』, 1985。
- ・(図8-16) 「無量寺ヶ谷遺跡」, 鎌倉市教育委員会『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8』, 1992。